Osaka University Knowledge Archive

Title	<図書紹介>中嶋朝子,羽生清,松本るり江 共著「チェコスロヴァキアの民族衣装 : 技法調査を中心に」源流社,1987年3月
Author(s)	元井, 能
Citation	デザイン理論. 1988, 27, p. 189-190
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52645
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

図書紹介

中嶋　朝子
羽生　　清　共著
松本るり江

「チェコスロヴァキアの民族衣装
—技法調査を中心に—

源流社，1987年3月

現在は「ヨーロッパは一つ」とはあまり言わなくなっている。ヨーロッパとか西洋とかよりも，くわしい事項が今は求められているからであろう。したがって，ヨーロッパを東西に分けて，東欧と西欧という表現が用いられる。さらに西欧を南北に分けて南欧と北欧といわれる。さらにこまかく分けようとすれば，それも可能で，国別，民族別という区別に細分しうることもできる。

さて，ヨーロッパといえば西欧を中心に考えがちである。それは理由のあることではあろうが，では西欧に対して東欧とは何かという問いにどう答えるべきであろうか。

歴史的に見て，東欧はいつも西欧の防波堤の役割を果していたことが多い。東からの異民族の侵入は東欧でせきとめられて，西欧は比較的安泰であったといえることもある。そして西欧は護られて，東欧に比して繁栄していたともいえる。

チェコスロヴァキアは東欧である。東欧諸国が持っていた運命をこの国も背負っていたわけである。ある意味からは陽のあたりにくかったチェコスロヴァキアである。この国の民族衣装についての詳細な報告が，中嶋朝子、羽生清、松本るり江の三氏によってなされているのが本書である。三人三様のそれぞれの角度からの報告は興味深い。

まず，中嶋氏は序についで，Ⅰ　チェコスロヴァキアの民族衣装として，1　風土と歴史、2　民族衣装について，3　チェコスロヴァキアの民族衣装として，①形態（シルエット），②色彩，③装飾，④素材と制作技法の概要，の各項に分けられている。風土と歴史の項では，大平原という風土がもつ歴史的な動き，2　の民族衣装では，まず，National Costume と Folk Costume の区別を，Ethnology と Folk-lore の違いを説明している。3　のチェコスロヴァキアの民族衣装では，図版とともに Expo'70に同氏が入手した現物を中心に語っている。

Ⅱの羽生清氏の担当は，昭和54年秋の現地調査の報告で，プラハ民族博物館，ブルノのモラ

ヴィア博物館，ウヘルスケ・フラディシチェのチェコスロヴァキア博物館，チチマヌイの博物館とウヘルスケ・フラディシチェの制作現場での報告である。

Ⅲの装飾技法は松本るり江氏によるもので，まず，一般的な技法について述べられ，以下，千里の国立民族博物館の所蔵になる26点の衣装の調査記録が述べられている。

以上，目次を追って記したが，中嶋氏は文献を示していて，同じ道の研究者にとって便利である。羽生氏は「チェコスロヴァキアの民族服が現代に生きのびているのは，民俗を残そうとする努力の結果であるとともに，異文化を自在に取り入れながら，時代の変化に対応してきた身軽さにある」との指摘は重要な視点といえよう。松本氏の調査は国立民族博物館に出向く時にはぜひ同伴したいという思いをもつ。

野口栄子著
「ロココの装飾」

岩崎美術社，1988年１月

昨年（1987）８月，「芸術新潮」が「気になるロココ」という特輯記事を組んでいた。そこで「なぜロココか」の見出しで「後世から軽薄短少と見られたロココが，実はそれまでの，いかにも人間らしい，人間くさいヨーロッパ文化の最後の総仕上げの時代という素顔を持っていたということを見落してはいけない」と述べている。

野口栄子氏の「ロココの装飾」は如上のように，時宜をえた出版といえよう。「今みんなの眼がインテリアに向いている。と言っても，職場で企業の能率を高めるための室内空間ではない。もっとプライベートな『遊びの空間』一人一人が自分なりの好みを生かし，自由に振舞い，遊ぶためのインテリアである」と飯塚信雄氏がのべているとおり，個人生活のために，ロココの復活が叫ばれているおり「ロココの装飾」は意味がある。

本書はインテリア装飾の図版群ではじめられている。Ⅰルイ14世時代（図１～13），Ⅱ摂政時代・ルイ15世時代（図14～136），Ⅲルイ16世時代（図137～152）の３つに分けられ，Ⅱの項がもっとも多い。この分類はあとの本文の内容ともつながっている。本文の方は，①はじめに―ロココとは，②18世紀概観，③ロココの国際様式，④ロココの起源，⑤アラベスク文様とグロテスク文様，⑥摂政時代とパレ・ロワイアル，⑦パレ・ロワイアルとオップノール，⑧ルイ15世の時代，⑨ブーシェとシノワズリー，⑩古典様式の台頭，⑪ルイ16世様式，⑫サロンと髪形，⑬おわり，の13項に分けて説明がなされている。全体を通読してロココの意味の概要をくみとることもできるし，個々の項目を興味にしたがってひろい読みすることもできる。また，ロココの主役はマリー・アントワネット王妃ではなく，マダム・ポンパドゥール夫人であることを知れば，興味は一層深くなろう。